

『法苑珠林』の総合的研究

——主として『法苑珠林』所録『冥祥記』の本文校訂並びに選注選譯——

《總目次》

緒言

若槻俊秀

【研究篇】

文學研究における小説類史料價値の再認識——『法苑珠林』、『冥祥記』の研究——

長谷川 慎

『法苑珠林』道光七年常熟燕園蔣氏刊本について

稻垣 淳央

【譯注篇】

『法苑珠林』所錄『冥祥記』の本文校訂並びに選注選譯

若槻俊秀・佐藤義寛・乾 源俊・浦山あゆみ・今場正美・福井 敏・本井牧子・仁木夏實・  
早川智美・長谷川慎・稻垣淳央・藤井政彦・大角紘一・一澤美帆・嘉村 誠

## 緒言

若槻俊秀

佛教についての一種の百科事典である『法苑珠林』一百卷は、唐初の長安西明寺の僧、釋道世によって編纂されたものである。佛教的百科事典「類書」としては、既に梁代の寶唱撰『經律異相』五十卷や虞孝敬撰『內典博要』三十卷（現在亡逸）等がある他、同じく道世撰『諸經要集』二十卷があるが、「法苑珠林」には他書にない特徴があつて、佛教者のみならず、ひろく一般の知識人たちに讀まれてきた。その特徴とは、この書物が、佛教にかかわる宗教的な觀念や用語の解説書であるに止まらず、中國の佛教説話を多く取り入れ、佛教信仰を視點として見た、この世の種々の様相が、その中に記録されている點にあつたのである。（『大乘佛典 中國・日本篇』 出三藏記集・法苑珠林 中央公論社、小南一郎氏解説）とされるように、本書は佛教が中國に傳來し、受容・流布され、多くの人々にとって日常生活の力となつていたことが、明確に知られる重要な書物である。また日本古典文學、特に『平家物語』等、日本佛教文學に大きな影響を與えている『法苑珠林』でありながら、從來より、本書への本格的な取り組みは、あまりなされていなかったことを省みて、二〇〇五・二〇〇六年度の研究所「一般研究」、研究課題『法苑珠林』の總合的研究」班を編成し、繼續的に研究會を催してきたことである。

研究活動を進めるに当たり、大部の本書に切り込む方法として、既に『古小説鉤沈』中で魯迅が早く手がけた『冥祥記』に焦點を當てて、その各版本對照作業を通して定本作りを行いながら、訓讀文、注解作成を行うことにした。

また本書は、既に散佚した翻譯經典や中國で作られた偽經類が保存されており、漢譯佛典や、中國佛敎學・佛敎史の研究にも貴重な資料を提供する重要な書である。また説話類が多く収録され、佛敎文學研究の領域からも貴重な資料なのである。

しかしながら、本書についての體系的な研究は數少ない。

そこで我々の研究班はこの『法苑珠林』を體系的に捉え、多角的に分析することを目指したことである。

その中において、版本研究・受容史・研究史に關して、各自、個別に調査・研究を進める形を取りながら、逐次検討の會合を設定してきたのである。

我々が主として検討を加えたのは、齊・王琰撰『冥祥記』の佚文である。『冥祥記』は六朝期の志怪小説集として重要であるが、既に述べたごとく、先行研究書である魯迅の『古小説鈎沈』での輯佚・整理をはじめ、部分的な譯注などいくつかあるものを、新たに検討し直し、校訂し譯注を作成することにした。

會讀には上記の目的を達成するために、當研究班に所屬する、佛敎學・中國文學・國文學、また哲學・語學などの多方面の専門家の参加を得た。このことにより、我々は單に『冥祥記』の定本策定、譯注作成という目的だけにとらわれることなく、多角的な分析を行うことができたと考えている。ここでは版本間の差異やそれぞれの説話に見える佛敎觀、日本文學との關わりなど數多く指摘され、數多くの議論が重ねられた。また、各篇・各部單位について、編者の編集方針における感應縁の位置づけ、そこで表現したかった意圖など、『法苑珠林』全書を通じての體例も明らかになった。

なお『法苑珠林』における『冥祥記』の位置付け、撰者王琰について、および『冥祥記』の版本についての論考二篇を校注に先立ちて掲げ、『冥祥記』の性格を知るよすがとした。本篇では、定本策定、譯注作業の結果報告が豫想を超えて大量なものとなった爲、全體の中より選擇するの止むなきに至った。

尙、本研究班として定期的研究會に出席され、意欲的な意見および作業にご助力されたメンバーは、譯注擔當者とし

て明記された方々の他、終始變わらず大所高所より助言を頂いたのは次の各氏である。

西尾賢隆、石橋義秀、大内文雄、采翠 晃、島 力崗、梶浦邦康。

尚、數多く開催した研究會に際し、各種の資料準備ほか、毎回の事務的手配等、當時任期制助手として参加してくれた長谷川愼・早川智美・本井牧子の諸氏、とりわけ二年目の世話役、最後の追い込み時における面倒な作業を着實に進めるに當たつての苦勞を頂いた稻垣淳央氏には、特に感謝する次第である。